

えた。その声には、「悪行」「逸脱」を批判するグループのイスラーム理解にも、また、その批判行為にイスラーム復興の特徴を見出す従来の研究者の理解にも還元しえない、独自の世界があると思えるのである。

これは、ひとつには「ダッワ・グループ」が、「悪行」という批判をしつつも、それ以上踏み込んだ直接的な批判を避けているが故かもしれない。このグループの抑制的な姿勢が、他方で、「新しいグループ」が自前の宗教的行為を発達させる宗教的空間の余地を生みだしていると考えすることはできないだろうか。

さらに、「ダッワに行く」(p.2)と言って出掛けた人びとが警察署を襲撃するという、本書冒頭のエピソード(ただしM村の例ではない)にも評者は着目したい。これは、タブリーグが一般に「穏健派」として知られるがゆえに、この組織に関連して現れた事態としては異例のことに思える。穏健派の代表格から暴力が生成するとはどういうことなのかと、評者は興味を持った。しかし、これまでのイスラーム復興の議論で指摘されてきたように、「逸脱」による批判のロジックが、「逸脱」とみなされた慣行や存在の力による排除にまで至ったことを想起するなら、「ダッワ・グループ」による「悪行」批判のまなざしの中にも、暴力につながる要素があると考えすることはできないだろうか。

もしこの想定が妥当であるならば、「悪行」という批判の仕方を取らない「新しいグループ」の身振りは、もうひとつのイスラームの態度のありかを示唆しているのかもしれない。そして、その態度の延長線上に津波後の民間信仰再生もあるのだとすれば、本当に「穏健」なものを生成しているのは、タブリーグよりも、むしろ村の多数派を占める「新しいグループ」の生活感覚なのではないのか、という問題が開かれてくると評者は考えた。ならば、著者がM村で見いだした「新しいグループ」は、イスラームをその一部としながらもそれを包み込んで広がる生活感覚の存在を我々に示しているのであろうか。こうした点に関する著者のさらなる探究を待ち望むとともに、その萌芽に立ちあえたことが、評者にとって本書を読む醍醐味

であった。

(池田昭光・東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所)

乗松 優:『ボクシングと大東亜——東洋選手権と戦後アジア外交』忘羊社, 2016, 320p.

近年、東南アジア地域研究のなかでスポーツを扱った重要な著作が刊行されている[Kitiarsa 2005; 2013; Creak 2015]。それらの研究は地域研究ではどちらかといえば等閑視されてきたスポーツを事例に、国家の存立機制を抉り出す点に特徴がある。マンガラ国家から国民国家へと転換を図る過程で、いかに臣民の身体の規律訓練が果たされてきたのか。いかに人口学や衛生学と手を結びながら、国民の健康問題が社会防衛論的に構成されてきたのか。いかに異性愛を前提にした両性の分割が、国家理性の保守に貢献してきたのか。一見取るに足らない対象であるように見えるスポーツが、実はこうした国家機軸の深部に届いていることを浮かび上がらせる点に、それらの研究の力点はある。

本書もまた、スポーツを事例に新たな歴史認識を提起する野心的著作である。事例として取り上げられるのはボクシングで、日本とフィリピンの文化交流史を描き直そうとするものだ。日本とフィリピンの国交が断絶していた1950年代に、ボクシングの東洋選手権は開始された。本書は外交に先立つスポーツ交流の歴史を紐解きながら、「帝国の秩序が厳格な政治支配からソフトパワーによって調整される時代」(p.30)において、いかに東洋選手権が「日本とフィリピン間における外交の膠着状態を解消する突破口となった」(p.256)のかを明らかにするものである。

本書がユニークなのは、この交流史を描出する上で「アウトロー」(p.87)の世界に着目したことだ。ボクシングはスポーツイベントであると同時に興行でもある。その興行師たちは「海千山千」(p.89)の者たちであり、ときには裏社会とも通じながら、東洋選手権の開催に尽力してきた。日本のボクシングコミッションや主要テレビ局もまた、アウトローとの密接な関係のなかで仕事をしてき

た。正史からは除外されがちなアウトローへの着目から、本書は戦後日本のもうひとつの復興過程を捉え、そこに日比交流史を記述する足場を設定するのである。

本書で登場するアウトローでも特に重要なのが、ロッペ・サリエルと瓦井孝房の二人である。ロッペ・サリエル（1905～95）はジャズ・ミュージシャンであった。音楽活動を通じて上海からグアム、合衆国まで行き来していた彼は、やがて音楽だけでなくボクシングにも携わるようになる。そしてフィリピンを代表する大プロモーターになり、東京の五反田に土地を買い「バンブーグローブ」というフィリピン・レストランも経営した。そのサリエルの下で、ビジネスパートナーとして活躍したのが瓦井孝房（1925 ないしは 1926～2005）だった。彼は銀座を根城にするヤクザであり、サリエルの日本での興行をサポートして、数々のボクシング興行を成功させた。

アウトローに生きた個々人の生活史を資料やインタビュー調査によって掘り起こし、かれらの人生がいかに戦後日本のテレビ局の開設や岸信介の外交戦略と絡み合っていたのかを説き起こすのが、本書の醍醐味である。そして個人に注目することで、東南アジア地域研究で近年登場しているスポーツ研究とは方法論的に異なる地平を切り拓く可能性も秘めている。すなわち、国家の存立機制を抉出する視角ではなく、アジア太平洋を横断しながら、ある意味アナーキーに展開した人的ネットワークの宇宙を描出すること（実際、本書では日本とフィリピンのみならず、ハワイでのインタビュー調査の内容が掲載されている）が可能になってくるのである。ベネディクト・アンダーソンは『三つの旗のもとに』[2012]で、19世紀後半に世界各地で活躍した移民アナーキストに注目することで、ナショナリズムとインターナショナル主義の相克を捉えたが、本書もまた興行師たちの国際主義を浮かび上がらせるような仕事であると言えよう。だがこの点は、後に立ち返るとして、先に本書の構成を確認しておきたい。

*

本書の章構成は以下の通りである。

序 章 忘れられた栄光

第一章 「帝国」の危機とスポーツ

第二章 日比関係はいかにして悪化したか？

第三章 興行師たちの野望とアジア

第四章 テレビ放送を支えた尊皇主義者

第五章 岸外交における露払いとしての東洋チャンピオン・カーニバル

第六章 ボクサーにとっての東洋選手権

第七章 戦後ボクシングと大衆ナショナリズムの変容

終 章 「大東亜」の夢は実現したか？

よく練られた構成である。スポーツのように発展途上の対象を扱う際に苦慮するのは、それをどのような主題的広がりのなかに収めるかという点だ。たとえばボクシングの東洋選手権を論じるならば、ボクシングの受容と普及の過程に特化したリ、あるいはアジアのスポーツの発展過程に位置づけて「スポーツ史」に限定して書くことも可能である（しかしその場合、探究は狭隘なものに落ち着く）。だが本書は、もっと広いキャンパスの中に東洋選手権を放り込もうとする野心的な著作であることが、上記の目次からも見て取れるだろう。本書はスポーツ研究であると同時に、より広範な日本近現代史の範域を念頭に置いた書き物であると言えよう。

内容については、目次の用語を拾っていくと理解できる。大東亜共栄圏という理念の崩壊とそのなかでのスポーツの機能（一章）、フィリピンに対する日本の占領政策の失敗と対日感情の悪化（二章）、戦後日本で暗躍した日比の興行師の活動（三章）、日本におけるテレビの普及過程とその中心人物の勤王・愛国主義（四章）、冷戦体制の急所を突くかたちで展開された岸政権の東南アジア外交（五章）、政治家とも興行師とも異なりを見せた日本人ボクサーの交流経験（六章）、日本のボクシングがフィリピンを模範としながらもそれを追い抜く過程とナショナリズムの絡み合い（七章）、全体のまとめ（終章）という内容である。

本書はボクシング東洋選手権の意義を考えるに

あたり、「興行師」(三章)、「テレビ」(四章)、「岸外交」(五章)、「大衆ナショナリズム」(七章)から考えようとしている。アウトローの興行師、テレビの発達とその中心人物、文化外交を考慮した岸信介政権、フィリピンの先に「西洋」を見つめフィリピン選手を倒すことが「西洋」を打倒することであると解した日本の大衆ナショナリズム。こうした内容が連鎖しながら、「東洋選手権という名の国際スポーツ交流の歴史的意義」(pp. 17-18)が示され、とりわけ「ボクシングのグローバル性こそが、外交問題の解決に先駆けて、フィリピンとの間に友好や親善を果たした」(p. 157)点が論述される。またそれは同時に、戦後日本が「引き裂かれた日本のナショナル・アイデンティティを取り繕う」(p. 253)過程でもあったが、そのためには「フィリピン人ボクサーの手を借りねば」(p. 253)ならなかった。

*

このように本書は、ボクシングを事例に日比文化交流史を描いたものである。関連する主題領域の押さえ方にしても、アウトローたちの裏社会を含めた事実の押さえた方にしても、手堅くかつ想像力ある仕上がりとなっている。また記述の方法論についても示唆的かつ問題提起的であり、さらなる議論を呼び起こすものであることが間違いない。私が著者と議論をするならば、次のような点をぶつけてみたい。

ひとつは、個人に着目する歴史記述についてである。本書の登場人物にはすべて生年・生没年が記載されている。この点を調べるだけでも膨大な作業が必要だったと思うが、国や地域を越境するネットワークの中で活躍する興行師やボクサーの姿が見えてくる。サリエルは東京や横浜で暗躍したし、瓦井も亡くなったのはマニラであった。この二人と交流があり、現在、ハワイに暮らす日系二世のスタンレー・イトウの語り(p. 74)も興味深い。こうしたネットワークが形成されたのは、著者も言うように「ボクシングのグローバル性」(p. 157)ゆえであるだろう。

しかしだからこそ、本書が後半に進むにつれ、

こうした個々人の生の軌跡から離れて、戦後日本のパースペクティブからの記述へと収斂していったのはなぜかと、私は考えることになった。たとえば、七章では「ボクシング先進国であったフィリピンとの対戦を通して、肯定的な日本の自己像がいかに回復されていったのかを明らかにしてみたい」(p. 221)と課題が設定されている。また、序章においても「プロボクシング東洋選手権は、敗戦によって打ちひしがれた日本人のアイデンティティを救済したと言っても過言ではない役割を担っていた」(p. 18)と書かれている。つまり、個々人の生活史とネットワークを丁寧に押さえて歴史記述を試みながらも、最終的には戦後日本の時空に特化して「日本人のアイデンティティ」の観点から物語がまとめられているのが、やはり気になるのだ。そのため終章で述べられる「東洋選手権は占領や戦争といった過去を乗り越え、未来に開かれた対話の一プロセスであったと捉えることができるかもしれない」(pp. 256-257)という一文も、この「対話」にフィリピンサイド(や日系移民)のパースペクティブが入っているのかどうか再考する余地があるように思う。すなわち、本書は文化交流史を描出しているが、それは「戦後日本のパースペクティブからの」文化交流史であるという限定性があるのではないか。個人に丁寧に目を向けることで、本書は比較社会学的地平での交流史研究を提示する可能性を秘めているように思う。だが、その達成を前に、「敗戦後の虚無感をスポーツによって埋め合わせしようとした」(p. 261)という「日本のアジア回帰」(p. 18)に特化して全体をまとめたことの含意について、著者とはぜひ議論してみたい。

もうひとつは、「ボクシングと大東亜」にまつわる女性の経験についてである。ボクシングは男性性を強調する競技であり、ボクサーには圧倒的に男性が多い。しかしながら、本書のように、ボクサーのみならず、興行師や政財界まで視野を広げてみるならば、そこには様々な女性たちのネットワークやそれにもとづく経験もあるのではないか。たとえば第三章で登場するラウラ・エロルデの語りは、本書では父ロッペ・サリエルについて説明するものに限って引用されている。だが一方で、

彼女は日本のボクシング界のドンであった本田明 (p. 72 の写真を参照) のパートナーであった長野ハルとの間に、固い友情とビジネス上の紐帯を育んでいた。そして、ラウラはサリエルとフラッシュ・エロルデの亡き後にフィリピン人のボクシング界で非常に重要な役割を果たしてきたし、長野は本田亡き後に帝拳ジムを切り盛りして日本のボクシング界に多大な貢献をした。これらの逸話は、ボクシングの世界では有名なものであり、著者が知らなかったとは想定しづらい。もとより一冊の本で書ける内容は限られているため、本書からは省いたのかもしれないが、しかし「ボクシングと大東亜」に纏わる女性の経験を組み込むならば、より立体的に記述が構成されたのではないか。たとえば、女性の動きに注目することで、銀座や横浜でのアウトローの世界とボクシング界とのつながりを、より具体的に捉えられるようにも思う。

重要な著作とは、完結した作品のことでなく、さらなる議論を呼び起こす作品のことであるはずだ。本書はその意味において重要な著作であるが、ここで呼び起こされた数々の議論が、今後学術研究としてリレーされることを望む。

(石岡丈昇・北海道大学大学院教育学研究院)

引用文献

- アンダーソン, ベネディクト. 2012. 『三つの旗のもとに——アナキズムと反植民主義的想像力』山本信人 (訳). 東京: NTT 出版. (原著 Anderson, Benedict. 2006. *Under Three Flags: Anarchism and the Anti-Colonial Imagination*. London and New York: Verso.)
- Creak, Simon. 2015. *Embodied Nation: Sport, Masculinity, and the Making of Modern Laos*. Honolulu: University of Hawai'i Press.
- Kitiarsa, Pattana. 2005. 'Lives of Hunting Dogs': *Muay Thai* and the Politics of Thai Masculinities. *South East Asia Research* 13(1): 57-90.
- . 2013. Of Men and Monks: The Boxing-Buddhism Nexus and the Production of National Manhood in Contemporary Thailand.

New Mandala. October 2. <http://asiapacific.anu.edu.au/newmandala/2013/10/02/pattana-kitiarsa-on-thai-boxing/>. (2016 年 11 月 11 日最終アクセス)

中村正志. 『パワーシェアリング——多民族国家マレーシアの経験』東京大学出版会, 2015, vii+298p.

I 本書の内容

エスニックな亀裂によって分断された社会では、エスニック集団の間の対立を穏健なものにし、多数派の専制に陥らずに少数派の意見を如何にして政治に反映させていくかが常に課題となってきた。そのための方策として様々な社会で長年試みられてきたのが、「主要エスニック集団による執政権の分掌」であるパワーシェアリングの仕組みである (p. 3)。新興国においては独立後にパワーシェアリングが試みられた例が少なくないが、そのほとんどが機能不全に陥って数年のうちに姿を消している。

エスニック研究の視点からは、本書が事例研究の対象とするマレーシアの社会は、エスニックな亀裂が交差するのではなく重複し、エスニック集団間の勢力が拮抗した社会であると分類されてきた。具体的には、マレーシア社会には多数派のマレー人と、少数派の華人およびインド人などマレーシア研究で言及される「民族」(bangsa) のラインに重複する形で言語、宗教、階級、職業、居住地といった亀裂が走り、社会が分断されてきた。

マレーシアでは主要なエスニック集団を構成する多数派のマレー人が独立以降は総人口の 5 割から 6 割を占めてきたが、主に少数派の華人がマレー人よりも経済的に優位にあったために、マレー人と華人を中心とする非マレー人との間で妥協が図られてきた。その妥協を現実のものにしていく仕組みが、主にエスニック集団に基づいて結成された複数の政党が参加する与党連合による統治である。独立以来続いてきた与党連合による統